

# 令和7年度 学力向上指導改善プラン

学校教育目標 自ら学ぶ意欲と方法を身につけた心豊かな志手原っ子の育成

## 目指す子どもの姿 『笑顔いっぱいの志手原っ子』 学ぶ子・優しい子・元気な子

変容を目指す資質・能力 a知識及び技能 b思考力、判断力、表現力 c学びに向かう力、人間性等 d情報活用能力 e課題解決能力 f学び続ける姿勢 gコミュニケーション能力

三田市立志手原小学校  
校長 小山 恵 介  
研究主題【 プログラミング・ICT教育 】

前年度		継続性	4月 (※全国学力・学習状況調査の結果などを受けて年度途中で変更する場合は削除、追記部分を赤字で修正)			2～3月 年度末評価	
学力向上に向けた重点的な目標	年度末評価 (前年度の成果と次年度に向けた課題等)		評価	学力向上に向けた重点的な目標 (変容を目指す資質・能力)	成果となる目標 (指標となる数値等)	具体的な行動目標 (成果目標達成のための具体的な手立て等)	教員評価 (今年度の成果と来年度に向けた課題等)
○文章を要約する力の向上。 ○根拠を明確にした論述する力の向上。 ○語彙力の向上。 ○話し合い活動などコミュニケーション能力を高める学習の充実。	○情報の扱い方については、発表の機会を意図的に多く取り入れたり、授業でICTを活用した話し合い活動を取り入れたことなどで、理解が進んでいる。 ○必要な情報を得るために、調べたり、本を読んだりすることを積極的に取り入れること、話の内容を伝え、自分が知りたいことを中心に伝えらることを意識しようとしている。 △「話すこと・聞くこと」領域と比べ「書くこと・読むこと」が苦手傾向があると考えられる。 △漢字の意味を理解し、文章中で正しく使うことが十分にできていない。 △文章と図や表を結び付けて考えたり、必要な情報を見つけ出すことに課題がみられる。	B	○根拠を明確にして論述する力の向上 (b, d, g)	○全国学力調査質問「国語の授業で、目的に応じて、簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫して文章を書いている」の肯定的回答が80%以上 ○全国学力学習状況調査質問「算数の授業で、どのように考えたのかについて説明する活動をよく行っている」の肯定的回答が80%以上 ○本校学びのUD化エッセイリストにて「ノートの取り方やファイル・プリントの整理の仕方を指導している」に肯定的に回答する教員数が90%以上	○目的に応じて数、式、図、表、グラフ等を活用しつつ、根拠を基に筋道を立てて考え、問題解決をする学習を進める。また、問題解決に至る過程を説明する機会を設ける。 ○国語や算数などの学習課題について、根拠を基に自分の考えをノートに書き、発表する機会を設ける。 ○登場人物の相互関係や心情、場面についての変化を読み取ったり、文章を読んで考えたことについて、交流したりする学習活動を発達段階に応じて取り入れる。 ○ノートや宿題などのまとめ方の工夫を児童が振り返る機会を設ける。 ○めあて・課題解決の方法・ふりかえり等のあるノート指導を行う。		
○図やグラフなど資料を基に考える力の向上。 ○解答の根拠(式の意味等)を説明する力の向上。 ○各領域における基礎的な計算の定着。	○伴って変わる二つの数量については、算数科だけでなく、社会科や理科、総合的な学習の時間など教科横断的に学習を行い、特徴を読み取る技能の定着がみられる。 △図形の領域に苦手傾向がみられる。 △「選択式」や「短答式」に比べ、「記述式」が苦手傾向がある。 △加法と乗法の混合した整数の計算をしたり、分配法則を用いたりする計算等に苦手がみられる。 △百分率で表された割合について理解が難しい。 △示された棒グラフと、複数の棒グラフを組み合わせたグラフを読み、見い出した違いを言葉と数を用いて説明することが苦手である。	A	○語彙数を増やし、それを活用できる力の育成 (a, c, g)	○全国学力調査質問「読書は好きですか」の肯定的回答が80%以上 ○前の学年までの配当漢字を90%程度理解することができる ○図書室の1人当たりの貸出冊数が昨年度比+3ポイント増	○新聞やニュースから自分が調べたい課題を選び、調べてタブレットで発表する機会を設ける ○教科書の各単元末にある言葉の力を適宜応用し、授業の中で、書いたり、話したりする機会を多く設け、習熟を図っていく。 ○朝の読書タイムや家族読書の日を確実に実施し、読書の楽しさを感じさせる ○学校司書と連携し、学習内容だけにとどめず調べ学習や多読につなげ、学校図書館を活用した学習を進め、文章に触れる機会を増やす。		
○漢字の使い分けができるようになる。 ○思考力を問われる問題に対して、情報や条件から考える力の向上。 ○漢字の活用や丁寧な書字などのノート指導。 ○思考力を問われる問題に対して、情報や条件から考える力の向上。	○プリント・タブレットを活用し、繰り返し学習を行い、どの教科も基礎的な力はついてきている。 △思考問題には、苦手意識を持っている児童も少なくない。 △漢字の習得や文字を丁寧に書くことに、困難を示す子もいる。 ○課題を解決するために、粘り強く取り組むことができる児童は少なくない。 △課題解決のために図や表、グラフなどを見たりそれを使って考えることが苦手な児童も少なくない。	B	○家庭での学習習慣の確立 (c, e, f)	○全国学力調査質問「学校の授業時間以外に、普段1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか」の回答の30分以上の割合が80%以上 ○学校評価保護者アンケートで「子供は家庭で学習する習慣が身につけている」に肯定的回答が80%以上	○算数や国語など様々な教科において、つまづきがある児童の支援に取り組む。 ○宿題などの家庭学習の進め方について、相談したり励ましたりするなど、自主的に学習できるような支援に取り組む。 ○低学年から発達段階に応じた学習の積み上げを意識して取り組む。		
○苦手な学習に対する抵抗を少なくする。 ○家庭学習の手引きの活用。	△読書に対する興味が高いとは言えない。 △算数、英語の興味が高いとは言えない。 ○学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を活用し、すぐに調べて楽しみながら学習を進めることができる児童が多い。 ○学校の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている。 ○学習した内容について、分かった点や良く分からなかった点を見直し、次の学習につなげようとしている。 ○生活における規範意識は高い。 ○行事(運動会・音楽会)への意欲や達成感が高い。 ○授業に対して前向きである。 ○友だちとの関係を大切に考えられている。 △学校以外で自主的に学習をすすめることは難しい。	B	○ICTを効果的に活用した「主体的対話的で深い学び」を実現する授業づくりの推進 (b, c, d)	○全国学力調査質問「5年生までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか」の週1日以上回答が80%以上 ○学校評価保護者アンケート「子どもはタブレット端末を使った学習に取り組んでいる」の肯定的回答が80%以上	○ICTを活用した学習を1日1回以上実施する ○授業の中にICTを活用した課題追究の過程を取り入れる ○授業の中にICTを活用した学び合いの過程を取り入れる ○高学年ではICT機器を活用した家庭学習を実施する ○夏季休業中はICTを活用した家庭学習を全学年で実施する		
○ICTを効果的に活用した授業づくりの推進。 ○情報活用能力の向上。 ○プログラミング的思考を育成する。 ○ICT機器を活用し、児童の思考を深める。 ○ICT活用やプログラミング教育の在り方についての研修をする。	○ICT機器等を活用した主体的・対話的な学びになる学習課題(目的)を設定し、友達との交流、自分の活動を振り返る学習等で、気付きがある授業作りを検討している。 ○ICTを活用した授業では、動画、写真、プレゼンテーション、大型テレビなどの活用が多く見られた。中でも「児童が映像で活動を振り返ること」や「自分や仲間の考えをまとめて伝える活動が学習に効果的であると感じている」。 ○1年生からiPadを活用することで、子どもたちのiPadの操作がスムーズになり、情報の収集・整理・発信ができるなど情報活用能力の高まりも感じている。 ○朝の会のスピーチ、宿題や夏休みの課題、学校行事など効果的と考えられる様々な場面でのICT活用が増えている。	A	○情報活用能力の向上 (a, b, c, d)	○4～6年生児童のタイピングの速度の平均値が1分間50文字以上 ○全国学力調査質問のうち、次の項目の肯定的評価平均値が70%以上 ①「PC・タブレットなどのICT機器で文章を作成する(文字、コメントを書くなど)ことができますか」 ②「インターネットを使って情報を収集する(検索する、調べるなど)ことができますか」 ③「PC・タブレットなどのICT機器を使って情報を整理する(図、表、グラフ、思考ツールなどを使ってまとめる)ことができますか」 ④「PC・タブレットなどのICT機器を使って学校のプレゼンテーション(発表のスライド)を作成することができますか」	○プログラミングやICT機器活用授業を日常的に実施する ○キーボードの文字入力やインターネットの情報の検索、映像編集等、目的に応じてICT機器を操作できるように、発達段階を考慮しつつ低学年から授業で活用する機会を設ける。 ○デジタルドリルを活用して、苦手な領域の計算練習を適宜行う。		
○行事での地域・保護者との連携協力。 ○学力向上に向けた小小、小中連携。	○学校運営に協力的であり、PTA役員を中心に子どもにとって達成感のある行事の在り方を考えている。 ○自然学校と修学旅行は小野・母子・志手原の3校で合同実施し、上野台中学校区で連携して行事を行った。 ○上野台中学校区の6年生が一堂に会し、中学校に向けての事前交流会を行った。	A	○学力向上に向けた小小連携、小中連携の推進 (c, e, f, g)	○上野台中学校区内の小学校との合同学習を年間2回以上開催する ○学力向上に向けた小中連絡会を年間2回以上開催する ○中学校の教員を招聘した授業を年間1回以上開催する	○自然学校や修学旅行の取り組みを通して、児童理解を深め、支援や指導の在り方の共通理解を深める ○中学校区内の児童・生徒の様子を交流し、校区の状況を把握するとともに児童生徒理解に努める。 ○6年生を中心とした児童の課題や実態について、中学校と交流の場をもつ。		

○「教員評価」は教員対象に実施した自己点検調査結果(0～4の5段階評価)の平均値  
 ○「評価」は年間の取組みについて、4段階で評価  
 A・・・十分に達成 B・・・おおそ達成  
 C・・・達成が不十分 D・・・ほとんど達成できず